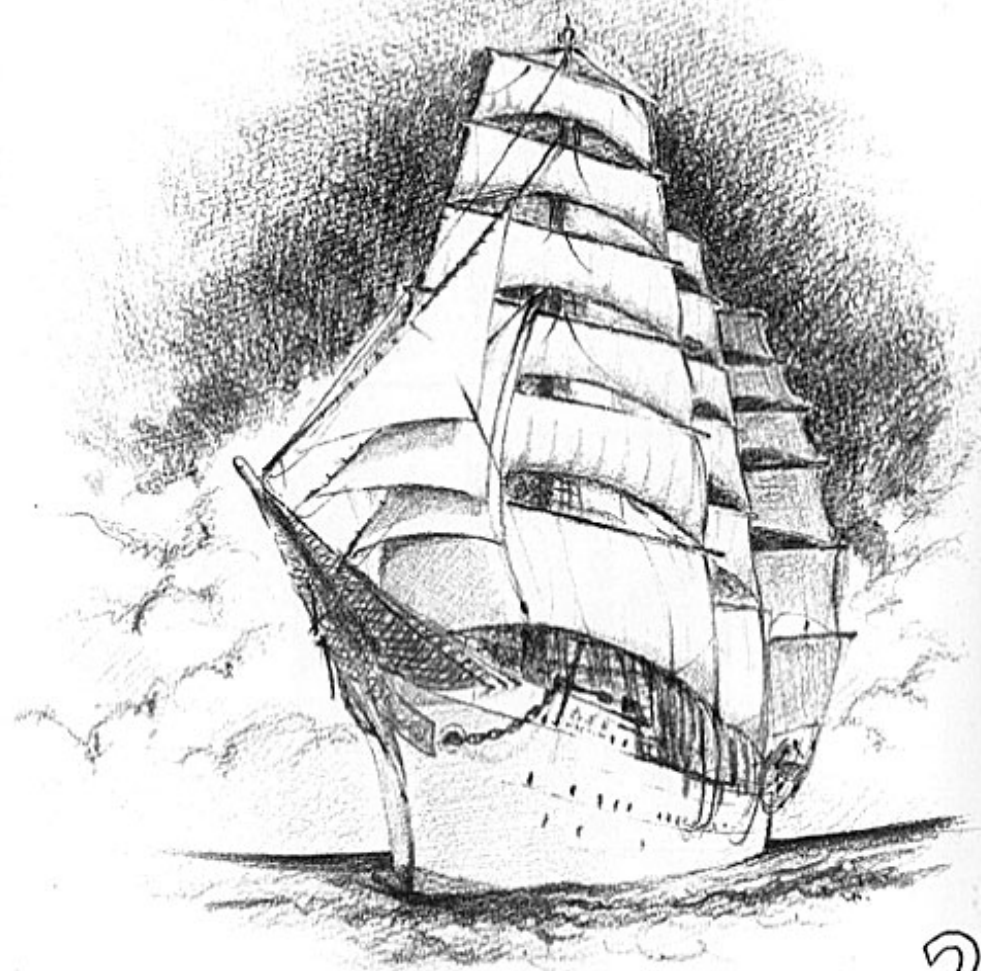


平成28年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第56巻2月号(通巻679号)

風土



2

実朝忌
神蔵器

一本の燈台となす水仙花

冬麗の奥の冬麗未完の句

ゆたかなる白息をこそ信じたし

佐助の一つが咲いて片糸くぼ

大寒や竹の根つこの地を走り

笹子鳴く磨きほそりに柱かな
万卷の書庫の余りに露の臺
寒満月大東京をてのひらに
窯出しに貫入走り三十三才
仏壇の奥の金色二月かな
石打つて火のとびつくや牡丹の芽
あをあをと天明け放つ実朝忌



竹間集

同人作品



梅ふふむ

橋添やよひ

王朝の和歌守展の淑気かな
冷泉家一千年なり梅ふふむ
松の内赤熊を飾る土間の上
神の座は部屋の真中に年明くる
雪蛸そこは(注)冷泉家社特の神事のため太夫の通り門
飛天女の足の指反る二月かな
銀箔の襖絵鏝朱明かりかな

かいつぶり

浅田 光代

神鶏の巫女につきゆく小六月
ジャズ低く流れ水鳥観察所
かんむりが浮かみくるはずかいつぶり
鳩浮くを待つや紅茶に砂時計
ピーターパンの妖精指に雪蛸
子どもらの去んでしまひし雪蛸
箸置きは小鳩のかたち冬うらら

山茶花垣

柿沼 盟子

時雨本郷来るゆかりの文人絵地図前
秋のばらそのまま冬の薔薇となり
セーターを着て掛け直す眼鏡かな
水筒のお茶まだぬくき石露の花
靴底の石取り除く神無月
連れ立ちて低き山茶花垣を過ぐ
凧や川は蛇行を繰り返し

洋学資料館

高村 令子

深と秋・閑と洋学資料館
資料館の展示医学書神無月
つぶさなる脳内模型そぞろ寒
胸像のまなざし弛む小春かな
森香り鳥啼いて落つ木の実かな
鳶上げて青空穿つ紅葉山
童謡も出て四五人の紅葉狩

烏 瓜

土井 三乙

よく通る径なり烏瓜真つ赤
岸壁に竿無しに来て鯨日和
砂乾ききつて砂丘の秋日濃し
風は秋砂の足跡吹き均し
温め酒旨し砂丘を戻り来て
文化の日修正液に指汚す
山の手の一足早き雪支度

姿整はず

根岸 善行

童謡の流るる駅や初蜜柑
青空のすゞ甦る初時雨
葉に触れて木に触れて降る木の葉かな
「寝太郎」の婆さま大根担ぎくる
初霜や富士まだ姿整はず
初霜の草光りそむ濡れそむる
懐に祠かい抱き山眠る

牡蠣筏

林 いづみ

大漁旗めぐらす社の菊花展
身に入むや天平碑文百四十
牡蠣筏復興兆す数と見し
木枯や一朵の雲のさらはるる
鷹渡る湿原にあるけもの道
丹頂のこゑ冬空に放たるる
告知板熊目撃の日時記す

竹間集作家特別作品

牡丹供養

中根 美保

須賀川

地震の罅か地紋か石碑冷えてをり
冬の日や傾くままの墓石群
石仏を冬木に凭せありにけり
菰巻の松端然と牡丹園
松籟を遠く牡丹の冬芽かな
指したまふ風の中なる冬牡丹
牡丹供養地を浄め火床浄め
地の燭をしるべに牡丹供養かな

永瀬十悟さん

日の名残空に焚火の始めかな
懇ろに牡丹焚火の熾そだて
檜葉の火をまづめぐらせて牡丹焚く
地の冷えの俄かに牡丹焚火かな
夕星のするどき牡丹焚火かな
言の葉の牡丹焚火を囲みけり
篋の風が煽れり牡丹焚
胸に抱き牡丹の楯くべんとす
大櫂そびらに牡丹供養かな
火の奥のしづかに牡丹供養かな
爆ぜることなき牡丹の焚火かな
牡丹供養火床あたたかく仕舞ひけり

山河集

同人作品



神蔵
器選

川べりをゆきて猫夫の眼とあひぬ

本間 羊山

雲の裏燃やしつくして冬日果つ
大根引く一つ大きく息を吐く

雪吊のまだ雪知らぬ藁匂ふ
胡麻おほき南部煎餅桂郎忌

一山に名の二つあり山紅葉

高橋まき子

木枯や海と別るる山手道
ふるさとの入江抱きて山眠る

冬の草海岸回りのバスに乗る
包装紙色華やぎて十二月

風の音十一月の陽を押しぬ

生田 作

農小屋の引き戸砂かむ小六月
空の色だがへて冬の沼二つ

冬晴れや日の透けてゐる猫の耳
短日の電話短く訃を告ぐる

白杖の音拾ひ行く秋の暮

杉田 春雄

出刃先に水走らせる秋収め
穰田の畔に展げる測量図

七輪を食み出す秋刀魚焼きにけり
寄り合ひの袖にかくしてにぎり酒

トンネルの中に県境冬に入る

島 玲子

今日ひと日海見て歩く冬遍路
お茶室の薄き座布団石路の花

尼寺へボージョレヌーボ届きけり
物理とは無縁のくらし大根煮る

◇特別作品◇

秋惜しむ

森田 節子

秋の夜の一人旅立つ成田かな
夜長さの機内に古き映画かな
色鳥やレイの香りに迎へられ
山一つ円く抱きて秋の虹
朝市は人種の柑塙秋晴るる
天高し貿易風に椰子吹かれ
市庁舎の半旗の靡き秋の声
鰯雲辻に巡査の手信号

爽やかや島にセーラー服の女学生
草の花ガレージ・セールにベビー靴
日本語に通す異国や秋暑し
溪谷の両翼のこし霧襖
ワイキキの秋の花火は波に乗り
藍深むダイヤモンド・ヘッド月上がる
感謝祭のターキー焼けて星月夜
教会の壁は珊瑚や水澄めり
ハワイ語の聖歌の響き秋うらら
聖餐のパンと葡萄酒秋澄みぬ
肖像の女王の眼差し秋思かな
抱擁は別れの言葉秋惜しむ

風土集



神蔵器選

葛紅葉一糸火走る一揆塚 伊東 吉永すみれ

吹く風も流るる雲も冬に入る

首塚は公郷実朝笹子鳴く

冬耕や老いの一徹貫きて

稲架襖村がずしんと重くなる

竹幹の触れて夜寒の軋みかな

チヤイム鳴る鳩の岸辺の幼稚園

枯畦の集まる橋を郵便車

冬ざれや天水溜の底見えて

麓より日暮れひた寄る冬田打

山茶花の散る悦びを知つてゐる

冬鳥の枝に有るらし指定席

短日や心忙しくなりゐたり

立冬や冬生まれにて冬ぎらひ

小春日や百花繚乱草月展

津山 生田 作

さいたま 須藤美智子

冬に入る百尺観音の虚空 福生 雨宮 桂子

舞ひ降りて天のもみぢの届くかな

綿虫も指先に来よ千手仏

握りてもてのひらにぬ冬日かな

夢追へばいそつぶばしの枯葉かな

東京湾突つ切つて行く神の留守

海展げ御会式迎ふ誕生寺

境内に誕生水井戸帰り花

石路明かり参道奥に鯛の墓

背を伸ばすタオル体操冬に入る

もう出たか神田の藪の走り蕎麦

笹鳴や正子の住みし武相荘

浮寝鳥次の橋まで流れゆく

烏瓜句座の空気の秋めきて

立冬や賀状の句など案じをり

川崎 鈴木 庸子

川崎 遠藤 道遙子

ロンドンも松山も雨漱石忌 川崎 豎山道助

立冬の耳立て麻葉探知犬

バイブルの十指に重し神の留守

憂国忌文学はもう間に合はぬ

終や無名作家に女弟子

桂郎忌明日に山茶花日和かな 川崎

榎植の実「ご自由に」とあり青柳寺

冬ぬくし木洩れ日に透き蛙句碑

炉開きてふ一重は白く冬椿

一葉忌伊勢屋の蔵戸開けてあり

通し矢の名残の寺や障子貼る 東京

曲がり来て石堀小路の石露の花

小春日や時計回りに摩尼車

振り分けに柿の干さるる細格子

山茶花や「悟りの窓」に白極む

侘助や箱階段の小暗がり 宇治

十夜鉦いろはもみちを震はする

抽斗に古き口紅一葉忌

植木屋とコーヒータイム冬日向

茶の花やビルの狭間の本能寺

秋天を突きさすマスト日本丸 東京

青空にすぢ雲走るベイブリッジ

森田節子

奥田茶々

渡辺やや

広田貞治

小春日や午後の山の端朱に靄る

初霜や薄化粧せり母の墓

焚火越し交はず言葉に年歩む

ドライフラワー逆さに吊つて冬に入る 川崎

一の坂から八の坂まで小六月

落合は坂多き街冬紅葉

小春風街東西に川流る

小春日の小江戸の入口連雀町

桂郎の墓参すませば雪ぼたる 大和

文机に青柳寺よりの榎植の実

木枯や途切れとぎれにサキソフォン

潮騒の届く林や石露の花

武相荘の棚の裸婦像冬に入る

トンネルを抜けて柿の実明かりかな 横浜

感謝てふ磯菊に添ふ花ことば

秋蝶と越ゆ襖橋三鬼の碑

幽玄の調べに染むる秋の潮

御用邸回りや山茶花咲き誇る

木枯や化身の観音立木仏 横浜

古墳塚より彩どりの冬の虹

鉄骨をすくひ上げたる真冬空

棕櫚一本丘の洋館冬日浴ぶ

仙田孝子

落合絹代

安永圭子

下山田美江